
これこそリアルなハンター生活。

がらな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これこそリアルなハンター生活。

【ISBNコード】

258832

【作者名】

がらな

【あらすじ】

主人公はゲームの中にいた。そう、ここはとあるオンラインゲーム世界での出来事だ。そんな主人公ミロクはそのゲームのプレイヤー啓介が帰つてくるまで動くことができない。啓介が帰つてき、ログインするとミロクはハンティングに出かけることができるのだ。あらゆるモンスターを倒していく、個人のレベルを上げて、もっと強いモンスターに挑戦していくゲームだ。そのゲームの中で行われる戦闘をぜひお楽しみに！果たしてミロクの運命は…？！

ハンターの心得（前書き）

はじめまして！

今回から新たな小説を書いていこうと思います！

某ゲームに近い気もしますが、オリジナル要素も満載なので楽しんで読んで頂ければなと思います！よろしくお願いします！

ハンターの心得

ここは、あるオンラインゲームの中の世界。このオンラインゲームは、とても有名なものであり、テレビのCMなどでも宣伝されて、全国の皆さんが知っているオンラインゲームだ。

その他に有名なのは、メイ ルストーリーやドルーガの塔などがある。

このゲームは、たくさんのモンスターを倒していくながら、モンスターから入手できる素材を使い、装備（防具や武器など）を完成させていき、レベルの高いモンスターに挑戦していくというゲームだ。

一応具体的に解説したつもりだが、わからないのであれば、いい例えがある。

皆んな、聞いたことがあると思うが、モンスターというのだ。

それに並ぶくらいの有名度を誇るこのゲームの中に主人公はいた。

「ううー、暇すぎるー、早く帰つてくれよおおー」

そう、主人公はゲームの中にいるのだ。

そして、その主人公が待つてるのは、そのゲームのプレイヤーである山本 やまもと 啓介けいすけだ。

まあ、いわゆる親みみたいなもんだ。中学2年生の啓介は完璧な厨二病だ。厨二病の代表者だ。

そいつが学校から帰つてき、このゲームのログインしない限り、主人公さんはベッドから動けないという規制がかけられている。

普段ならベッドで寝ているのが普通だが、今日は何故か目が覚めて

しまい、暇という名の敵に襲われ続けていたのだ。
その暇に耐えながらも啓介の帰りを待つ。

そして、2時間後

「たあだいまー」

啓介様のお帰りだ。

家には啓介以外はいなく親は皆仕事兄弟はない。
ということから啓介は家でいつも一人だ。

帰ってきて、手を洗うより先にパソコンのスイッチを入れる。
パソコンを起動するとまずログイン画面まで行く。そこまで行く手
つきは慣れたもので凄かった。

そして、ログインした。

「うお？ おっしゃ！ 動けるぞー！ 帰ってきたのかー！ やつたぜえ
ええええーー！」

そうして、主人公のゲームが始まった。

主人公の名前はミロク。

ミロクは、このゲームの中で上級者扱いされてる結構いい腕のやつ
だ。

そしてログインが完了し、ミロクは集会所へ出た。ここは『フェイ
ルの村』と言われる村だ。ミロク達はこここの村でハンター生活を過
ごしている。

ミロクがログインしました。

「オオー、ミロクじゃーん！ 遅かったなーー！」

「ああ、悪いな、啓介が帰つて来んの遅くてよお

「そつかそつか、それは仕方ないな！」

ログインするや否や近づいてきたのは、いつも共にクエストをクリアして行っているハンターさんだ。

その名前は「たかやん」という。

たかやんはミロクと同じくらいハントティングがつまくて、常に一緒に行動している。

基本は一人で何でもこなして行ってしまう。

そんな一人は、今日もハントティングに行く。

啓介の一日のゲームのプレイ時間は約8時間程度。

周りのプレイヤーからすると長く感じるが、啓介自身は少ないと思つていいらしい。

素晴らしいゲーマーだ。一度ハマつたゲームはあまり飽きないらしく、長い間やつていられる体质だそうだ。

今回はハントティングに行かず、このゲームについて詳しく説明していきたいと思う。

まず、ハントティングに行くためには、クエストを受注しなければならない。

クエストにはレベルがあり、下級、上級、アドバンス級、と3段階に分けられている。

今、ミロク達は上級レベルのモンスターを倒してきている。

アドバンス級はほんとうに強いモンスターばかりなので、気をつけたほうがいいとのことだ。

ミロクたちも一度挑戦したが、全く歯が立たず、クエストリタイアしたという。

そして、そのクエストを受注するための場所が集会所という。

集会所では全国の皆さんのが集まつておりたくさんのハンターが生息している。

クエストは集会所にいる、受付嬢さんにクエスト一覧を見させてもらい、その中から選びクエストへ出発する。

クエスト一覧には、たくさんの人から依頼されたクエストがこんもりと書かれている。

クエストの依頼は村長に頼めば誰でも依頼することができる。
そのかわり、クエストをこなしてくれたハンターには報酬金を払わなくてはならない。

ハンターは、クエストをクリアすると、報酬金とその倒したモンスターの素材や鉱物などがもらえる。

ハンター側からすると、村の平和を守るというのもあるが、その報酬目当てが多い。

実際ミロク達もその報酬を田当てにハンティングしている。
その報酬で手に入った素材を使って武器などを作っていくわけだから、報酬はかなり重要なものだ。

もちろん、ハンティングに行つてる最中にゲットしたものはそのままのそのゲットした人のものになる。

次に、ハンターたちの職業について説明しよう。
職業とはハンターたちが行う攻撃手段の傾向だ。

まず一つ目は「ソルジャー」だ。

ソルジャーとは主に剣を使い敵と戦う。

そのソルジャーが使える武器は、大剣、片手剣、短剣、太刀、槍、などがある。

それぞれの武器によつてメリット・デメリットがあるのでそれを駆使しながら戦うのがソルジャーだ。

そしてもうひとつは「ガンナー」だ。

ガンナーは、簡単に言うと鉄砲のようなものを使い攻撃する、遠距離攻撃がメインの職業だ。

そのガンナーが使えるのは、ボウガン、ライフル、一二丁拳銃、弓、などがある。

ガンナーは弾などを所持していかなければならないので、結構からだが重くなり、若干動きが鈍ってしまうが、それをカバーしながら戦うのがガンナーだ。

そして最後。

もう一つは「マジシャン」だ。

マジシャンは全体的に少なく、マジシャンをしている人はあまり見かけない。

マジシャンの主な攻撃方法は、魔法だ。

だが、マジシャンは殆どといって良いくらい攻撃はしない。

基本、マジシャンは周りの皆んなの補助に付いている。

体力を回復させたり、攻撃力を上げたり、モンスターの動きを制御したりなどと役に立つことしかしない。

アドバンス級のモンスターを倒しに行く時には一人はいたほうが心強いだろう。

これで職業についての説明は終わりだ。

あとは、これから進むに連れてわかってくると思うから、説明は不要だ。

「ふむふむ、なるほどね、この初心者ガイド、結構詳しく書いてあるわ。」

ミロクがそうたかやんに話しかけた。

するとたかやんはビクッと体を震わせ、こういった。

「うえ？！なんか言つた？？」

全く聞いていなかつたようだ。

聞いていなかつたと言つより、魂が抜けていたようだ。

「いや、この初心者ガイドすぐえなあと思つてた。」「

ミロクがきちんともう一度説明してあげるが、たかやんはこうした

「ああー！それね！俺も最初読んだよ、かなり詳しく書いてあってわかりやすかつたわ」

ミロクはたかやんも読んだのかと感心し、その初心者ガイドを棚にしました。

これからハントティングに出かけるため、今は準備をしていたところだった。

「とりあえず、何倒しに行くか決めようぜ」

「おれさ、ライムリアの武器作りたいんだよね、つきあってくれない？」

「あ、ライムリアか、いいよー」

といつわけで、これからミロク達は上級レベルのモンスターの【雷神龍 ライムリア】を倒しに行くことになった。

ハンターの心得（後書き）

感想評価お願いします！

ライムリアとの死闘 前編

これからミロクとたかやんの死闘が始まる。

その為の準備を行う。

まずは、装備を考えなければならない。

今から倒しに行くのは【雷神龍 ライムリア】だ。

相手は雷属性なので、雷耐性値が強い防具で挑む必要がある。

そして、相手の弱点は火属性だ。

それにより、火属性攻撃が可能な武器を装備するのがいいだろ？

「うーん、どれでいこうかなー。俺はこの大剣でいこうかな！」

そういうながらミロクが手にしたものは、真っ赤に染まつた、あからさまにこれは火属性だとわかるような武器だった。

その大剣はとても大きく、更にとても重くと不便な点ばかりだが、攻撃力の高さではすば抜けて大きいものだった。

ミロクはその大剣を担いで集会所へと向かった。

その頃たかやんは

「火属性だろ？ 多分ミロクはあるの大剣で来ると思うんだよなー。だったら俺は二丁拳銃かな。なんてつたつて向こうは動きが遅いつていうデメリットがあるわけだから、こっちは早く動けたほうがいいに決まってるよな！ よし！」

と、たかやんは独り言を呴きながら、あ、いや、叫びながら装備を着々と決めていた。

そして二丁拳銃を腰のポケットにしまい、集会所へと向かった。

そして二人は集会所で合流した。

「ああー、やつぱりミロク大剣できやがつたw」

「な、なんだよ。変えてくるか？」

「いや、俺はそう来るだろうなと思って相性考えて装備してきただ！」

「おま、すげえなwさすがたかやんだ！」

たかやんは自分の予想が当たったことに嬉しげな顔をしてアイテムの調達を終えた。

回復薬、爆弾、罠、食料、その他個人で必要なもの、を持ち、クエストへ出発した。

クエストの現場は「無人島」だ。

ここには至る所に雑魚モンスターがうようよしている為、大型モンスターだけに集中して攻撃することが若干困難な場所でもあるため、ここでのハンティングは上級として扱われている。

そして二人は無人島に到着した。

「ハーアー、ここ来るの久々だなあー！」

「おい、たかやん、あまり浮かれんなよ？ライムリア結構強いからな？」

「わあってるよ、んな事！早速行こうぜー！」

一人は無人島の中を彷徨いながら、ライムリアを探していた。すると、雑魚モンスターが急に攻撃してきた。

「痛つ」

傷は切り傷程度だったが、まあまあ深く刺さっていた。

「おー、お前、こきなり俺に噛み付くとはいひ度胸じゃねえか…」

ミロクは噛まれたことに對して苛立ちを感じた。

そして斬りつけようと、大剣を下ろし、大きく構えた。その時、たかやんが拳銃でバン！と一発がました。するとその銃弾はモンスターに直撃し、即死だった。

「うおい！俺が思つくりたたつ切るといだつただろ！」

「ミロクの武器は隙が大きいからこいつちで撃つたほうが早いと思つたんだ。しかも、今はソムイルを倒してゐる場合じやないだろ？ セツヒライムリア倒そづせー！」

ミロクはそつだなと頷きそのまま探しに向かおうとした。するとその時、後ろから大きな音が聞こえた。

「ん？ なんだいまの音。」

「ライムリアさんの『』登場だー！」

そう、ライムリアが空から舞い降りてきたのだ。

ライムリアは、ドランゴン。空を自由に飛ぶことができぬ。どんなモンスターかは』想像にお任せします

ライムリアは羽を使いやつくつと着地した。

だがしかし、ライムリアはまだ、ミロクたちの存在に気づいていない。

「お、まだ気づいてないようだな。」

「ゅうくりゅうくつとライムリアに近づいていき、真横にたつた所で

「任せな」

大剣を大きく構えた。

が、その時、気づかれた。

「グ……グオオオオオオオオ……」

ライムリアは大きく咆哮した。

そしてミロクは剣を思いつきり振りかざした。

「わるせええええ……！」

その大剣はライムリアの胴体を斬りつけた。

「よっしゃ行くぞおお……！」

二人の死闘が始まった。

たかやんは、すごいスピードで、走りながら性格に顔面を撃ち抜いていた。

ミロクは大きな大剣をブンブン振り回し、ライムリアを斬りまくっていた。

するとライムリアはちょっとだけ飛び、口から雷球をこちらに吐きつけて来た。

その雷球はミロクに直撃した。

「ぐああつー！」

ミロクは感電してしまい少しの間体が言うことを効かなくなつた。

その隙を逃さず、ライムリアはミロクを抑えつけ、大きな口でミロクを噛み付けた。

「うああああああああ！」

ミロクは叫ぶことしかできなかつた。

するとたかやんは2つの拳銃をぐらぐらさせて力を溜め込んだ
そして両方の銃で一気に撃つた。

離れろオー！！

その銃弾はライムリアの顔面に直撃した。

一ヶ才才才才才才才才

ライムリアの大きな角が砕け散った。
それと同時にライムリアはよろけた、その隙を逃さずヒロロックはす
ぐさまその場を離れた。

「助かつたぜ……」

「ああ、早く回復薬を食め！すぐに来なさい！」
「わかった。」

ミロクは回復薬を飲んだ。
すると傷がみるみる修復していく。

「元気百倍ー!! ロークマン!」

「おい、いいからわりと攻撃に参加しろ。」

ミロクがつまらんボケを繰り出してくるとおり、たかやんはたくさ

んの攻撃を受け、からだがボロつてきていた。

「おお、ワリィ、よし、行くぜえ！」

そして、ミロクが戦いに参戦し、攻撃を開始した。ミロクの大剣はライムリアによく効いていたようだ。だんだんライムリアも弱ってきている。

「よし、ミロク！」うちに落とし穴仕掛けとくぞ…」「おつけ！」

そして落とし穴を仕掛け終わるのを見計らつて、ミロクは落とし穴のある方へライムリアを誘導した。

ライムリアは見事に落とし穴にかかった。

その場で何もできず暴れているライムリアの顔面の部分に一人は大きな爆弾を設置した。

「ようし、たかyan！撃てええ…！」

たかやんは全力で溜めた銃を爆弾めがけて撃つた。

すると爆弾は大きな音をたて爆発し、ライムリアの顔面はボロボロになつた。

角が2本とも折れてしまつたライムリアは、とてもかっこ悪かつた。するとライムリアが怒つてしまい、大きく咆哮をした。

「ぐああーーうるせえーなあーー！」

するとライムリアは、空の方へ顔を向けて、また大きく咆哮した。そうすると空はがだんだんと暗くなつていいくのが分かつた。そして…

「グオオオオオオオオ！？！」

ズドン……バアアアーン！！！

空から雷が落ちてきた。

そしてその畠かたかやんと三日ヶに命中した。

二人は声を合わせ倒れてしまった。

大ダメージだ。

更に一人は感電してしまい全くからだが動かなくなってしまった。
果たして一人の運命は……？！

ライムコアとの死闘 前編（後書き）

感想評価お願ひします！

お気に入り登録（・・・・）ノリシク！

ライムリアとの死闘 後編

「くつ……からだが……動かねえ……！」

雷をモロ食らつてしまつた二人は、からだが麻痺していく全く言うことを効かない状態に陥つてしまつていだ。

「へい」と「イム」がこなしくて書かれてくる。そして、鍵をなげ

「ぐあああああ！」

体が動かないため抵抗できずやられるがままに攻撃されていた。ミロクは、何度も何度も引っ搔かれていて、からだは傷だらけだった。

「ぐう……うああああああ……やめやめ……」

それを横目で見つめるしかないとやんはある意味ミロクより辛かつたはずだ。

し！

「ちくしょ、一動せよ、一・一・」

いくら頑張つてもやはりからだは動かなかつた。

するとライムリアが今度はたかやんの方へよってきた。
そして今度はたかやんに攻撃を始めた。

「……ぐああああああああ……死ぬつ！死ぬううう……」
「たかやああああん！！！ちくしょつ……ちくしょおおお……」

「光り射す閃光よ、今ここに新たな静寂を産み出せ。光の制裁」

「グオオオ？」

ライムリアの動きが止まつた。
そのライムリアのからだには無数の光の矢が刺さつており、関節を止められていた。

「雷鳴に轟く稻妻よ、今ここに新たな激戦を打ち破れ。緑の宝札」
ミロクとたかやんのからだにあつた無数の傷がみるみるうちに回復されていく。
そして、麻痺も溶けた。
体が自由に動く。

「大丈夫ですか？ 怪我の方は完璧には治りませんので、無理はしないで下さい。」

「あ、ありがとうございます！あのオ、どちらさまですか？」

「ほら、よそ見をしてはいけません。ライムリアが動き出しますよ？」

？」

謎の男がそう言つと、ライムリアは大きく咆哮をした。

そして、ライムリアは口から雷球を飛ばした。

その雷球は謎の男の方へと飛んでいった。

「光り輝く天使よ、今ここに我の身を守りし一枚の壁を産み出せ。」

謎の男がそう言つとその雷球は当たるギリギリにして消滅した。

「な、何だ、今の技……。すつげえ——！！」

「田久、わいせついつぶつ殺すぞ！」

ライムリアはもうすでに十分弱っていた。

かくノスノリトた

三口は大剣でガードし、すぐに攻撃に繋げた。

ていた。

つと撃ち続けた。

「おつかせ」

ミロクは大剣でライムリアの頭をたたき切った。

するとライムリアは倒れた。

「今がチャンスだ！ミロク！思いっきり斬り付ける！」

ライムリアはズタズタに斬られ、頭は銃弾でバシバシ撃たれた。そしてライムリアはそのまま立ち上がることはなかつた。そう、ライムリアを倒したのだ。

「ニヤウニヤー！」

「よつしー・早速剥ぎ取りだ！」

二人は持参してたる剥ぎ取りナイフでライムリアの素材を剥ぎ取った。
そして、そのまま集会所へと戻った。

「はい、こちら報酬金の￥5,400です！」

「ありがとうございます。」

お金もいつぱいゲットしたし、今回は報酬が良かつたのでミロクは満足そうな顔をしていた。

「あ、そういうえば、さつきの人だれだったんだろう？」

「ああー、後で見つけたら礼を言わなきゃね」

と、一人で話しているときに、その人はやつてきた。

「やあ、一人とも。ライムリアの討伐お疲れ様。」

「あ、さつきの！」

「噂をすれば…だな」

その男はさつきまで防具のせいであまり良く顔は見えなかつたが、今は顔がよく見える。

そして、ものすつ」「イケメンだ。

「あ、先程はありがとうございました！」

二人は深々と頭を下げ礼を言った。

「いやいや、ただ通りすがつただけですから」

嘘へたくそっ！通りすがつたって、無人島までなにしに来とんねん！

「あの、もし宜しければ、お名前を…」

「あ、私はまいける と申します。」

「まいけるさんですか、これからも色々お願ひします

「はい！あと、こちらから一つお願ひがあるのですが…」

「なんでしょう？」

「あの、あなた達と共に行動させていただけませんか？いわゆるパーティーと一緒に組みたいのです。」

なんと、まいけるさんから、パーティーに入りたいという申請がきた。

こっちが頑張つて誘おうと思つていたところだつたのですごく嬉しかった。

「ほ、ほんとうですか？！」

「是非、よろしくお願ひします！」

「いいんですか！？」

「ええ、もちろん！」

「ありがとうござりますーー！」

こうして、一人仲間が増えた。

「ちなみに、もうお分かりでしょうが、私は”マジシャン”です。」「やはりそうでしたか！すぐ役に立ちました！ありがとうございますーーましたー！」

「レで、ソルジャー、ガンナー、マジシャンが出揃つた。
これからもロクたちのハンター生活は続く。

ライムニアとの死闘 後編（後書き）

2話に渡るライムニアとの戦いが終わりました！

感想評価お願いします！

お気に入り登録（・・・・）ノヨロシク！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5883z/>

これこそリアルなハンター生活。

2011年12月20日22時56分発行